

「銚子でさまのつくのは、観音様に玄蕃様」と巷間でうたわれるほど、田中玄蕃家は、近郷近在はもとより、広く他の地方まで知れ渡った旧家でした。田中家は、早くから漁業と造醤油業を営み巨富を積みました。その最も栄えたのは江戸末期頃で、名字帯刀を許され、中でも11代玄蕃憲章には、御用達頭取筆頭のほか、御祐筆格次席という普通地方の庄屋や郷士ではとてもおよびもつかない待遇が与えられていました。

1 田中玄蕃の生業

ヒゲタ醤油の創業については、『醤油沿革史』(明治42年、金兆子著)に次のような記載が見られます。「抑もヒゲタ醤油の起源は、元和2年 田中玄蕃の中祖が始めて醸造したるものにて、当初摂津西ノ宮眞宜九郎右衛門の勧誘を受け農業の余暇を以て溜醤油の醸造を営み、商標を定め江戸本船町眞宜支店に於いて発売したるものなり。(後略)」。溜醤油(関西醤油)を醸造して売り出したのが銚子における醤油醸造の初めといわれ、農閑期を利用した小規模の醸造という程度でした。その頃の農家では、各種の生活用品を自給することが多く、江戸後期には農家でも醤油を買って使う者が増えたようですが、江戸初期にはほとんどの農家は自給していたと思われまます。

田中家の言い伝えでは、醤油醸造を始めたのは3代田中玄蕃、当時の名は石橋源右衛門だといえます。田中玄蕃は地主であり漁業経営者でもあったので、多くの雇い人(慶応3年「人別書上」に約120人と記載)を抱え、自家用のためにも多量の醤油をつくる必要がありました。比較的労力を多く要する醤油醸造も、農業・漁業の閑散期の労力を使えば、容易に行うことができたようです。自家用の余剰分を販売し、自らを「農間造醤油渡世」と呼びました。初めは溜醤油でしたが、その後しばしば醸造法を改良し、田中金兆子は「元禄10年の頃初めて醸法を現今の如き関東醤油とせり」と述べています。小麦を多く使用し始めたのも元禄の頃からと思われまます。

江戸が繁栄するにつれ、江戸に近接する地方都市も次第に発展しました。利根川の舟運も治水事業の推進により開発され、銚子は仙台藩、磐城藩などの廻船で賑わいました。江戸最大の衛星都市として発展した銚子には、全国各地から人が集まるようになりました。併せて、廻船の往来する利根川沿岸の小都市が栄え、それにつれて醤油の需要も増し、初めは副業的性格の醤油醸造業でしたが、しだいに販路も拡大されました。もともと田中家は、大地主で主業は漁業であり、『玄蕃先代集』の記述は漁業や漁港開発のことが主で、醤油に関する記事は見られません。また、『玄蕃後代集』もその前半は殆どが漁業関係の記事で、後半に至って、初めて醤油に関する記載が見られます。

2 銚子の経済界を代表した田中玄蕃

『玄蕃先代集』の記録には、「圓福寺の開基の頃に五人の百姓があった。玄蕃、惣左衛門、清左衛門、惣右衛門、甚左衛門の五人で、その後分かれて、新兵衛、四郎左衛門、助右衛門、甚右衛門が加わり、都合九人になった」と記されています。玄蕃家は、圓福寺開基の頃からあったと言われています。その圓福寺は飯沼山と号する真言宗の巨刹で、その開基は、寺伝によれば弘仁年間(810年～824年)とあります。5代玄蕃は

繁貞と称し、漁業にも造醤油業にも力を入れ、元禄10年頃、醤油の醸造法に改良を加え、関東醤油をつくったと言われています。また、5代玄蕃は伊勢地ヶ浦(現在の海鹿島海岸)に漁港を築きました。『玄蕃後代集』には、「元禄8年9月より、田中玄蕃は伊勢地ヶ浦に船着場の普請をはじめ、海岸の開発をとげ干鯛場を設けている」と記されています。江戸後期・末期、銚子の有力な名主の主な事業には、①干鯛集荷人として干鯛場の管理運営(干鯛場の所有者)、②漁船を持つての浦方の仕事、漁業経営、③高瀬舟所有者として廻船問屋の経営がありました。醤油醸造業者は高瀬舟を利用すると共に、自家用の手舟も所有し原料の集荷に、製品の輸送に、利根川を利用しました。

田中家の最盛は9代通喬、10代貞矩、11代憲章の時代であり、通喬は田中家を隆盛に導き、貞矩、憲章は幕末・維新の折、家業の経営に努め、銚子の経済界を代表した人物です。10代玄蕃は百路と号して和歌や俳諧に親しみ、江戸から文人墨客を招きました。圓福寺境内には、日本橋の豪商古帳庵の「ほととぎす銚子は國のとっぱづれ」の句碑が残り、碑陰には「天保12年、飯沼、田中玄蕃、野崎小平次、同所世話人」と刻まれています。この句は、銚子を代表するものとして人口に膾炙しています。

幕末の尊皇攘夷・倒幕や佐幕の時代、高崎藩の財政は窮乏し、この年の慶応4年(1868)3月、銚子領へ五千両の調達を仰せつけました。『玄蕃日記』には、その対応に苦慮していると記されています。納入の記載はありませんが、連日協議し再三再四、代官所へ足を運んでいるので、恐らく都合して納めたものと推測されます。この他にも、高崎藩は田中玄蕃のような豊かな商人に、しばしば御用金の調達を命じています。

3 明治期の田中玄蕃家

第11代憲章(「美加保丸遭難者の墓碑」建立)は明治3年に死去し、謙蔵が襲名して跡を継ぎました。12代謙蔵は質実温厚な人柄で、父の死後専ら家業の醤油業に専念しました。謙蔵の長子直太郎は金兆子と号しました。直太郎の考え方は進歩的で、いち早く壘詰醤油を販売、工場の一画にレンガ造りの御用醤油用の蔵を建設し、所有する玄蕃山から良水を引き醸造用の取水をしました。20歳代の若さで総武鉄道の敷設、銚子電報局の開設、銚子遊覧鉄道の敷設などに多額の出資をし、主導的働きをして人々に感謝されました。また、総武鉄道の敷設について、直太郎は大変な熱意と努力を惜しまず大金を出資し鉄道輸送の発達に貢献、鉄道は明治30年に開通しました。

4 ヒゲタ醤油創業者の豪商田中玄蕃

田中家に伝わる『玄蕃日記』95冊は、10代貞矩と11代憲章父子により書き継がれました。文化9年に始まり明治5年に至る61年間の気象から社会事象まで記録した詳細な日記で、銚子の史料としても庶民の生活記録としても貴重な資料です。また、『玄蕃日記』は、銚子市指定文化財です。今でも銚子には、地域に親しまれ名付けられた玄蕃山、玄蕃坂の名称が残っています。田中家の醤油工場と屋敷は圓福寺に隣接し、製造した醤油は玄蕃坂を下り、まっすぐ先の玄蕃河岸から利根川を遡り江戸へ運ばれました。また、田中家菩提寺の圓福寺過去帳には、「田中玄蕃ノ門前捨子 法全童子 文政6年正月7日」という記録(他にも散見される)が残っており、当時の寺と田中玄蕃家と住民の厚い信頼関係の一端が窺われます。